

# 業



## と 杜 園 えん

神主・奈良県立大学客員教授

岡本彰夫

Akio OKAMOTO



おかもと・あきお  
1954 (昭和 29) 年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司 (2015 年退職)。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫庫長。著書に『日本人よ、かくあれ』(ウェッジ) など多数。

木彫界の雄、平櫛田中翁が明治の木彫界を問われての答が「一が竹内久一、二が無くて、三が森川杜園」であった。

森川杜園は稀代の名工である。今回奈良県立美術館に於いて開催された「生誕200周年記念〜森川杜園展」は実に一九九三年同館で開かれた「没後百年記念19世紀奈良の異才〜森川杜園展」以来二十八年振りの快挙である。

展示内容は圧巻で、よくぞこれだけの件数を集められたものだという驚きと、多種多様の杜園の活動に、更なるその妙技を思い知らされた次第である。しかも多くが個人蔵であったから、担当学芸員の並々ならぬ労苦が偲ばれた。聞くところによると少ない担当者であったがために、今回の図録に杜園の款記や刻銘をも、併せて撮影収録掲載が叶わなかったという。

あったと聞いている。

杜園の収集家として奈良で著名な人は谷川喜六翁で、収集かつ研究をされた人である。故に完品ならずとも入手し、それらがまた杜園に私淑した平櫛田中翁が譲り受けて、田中記念館に収蔵されており、今回の展覧に資されたことは眼福であった。

杜園という人は筆マメな人で、多くの記録を留めているが自ら「三業」と称して、狂言・絵画・彫刻それぞれで一人立ち出来ると誇ったが、加えて彫刻の域に「做古」を加えずばなるまい。前回の杜園展の際、担当された菅居正史学芸員が、金峯山寺経塚から発掘された金銅製の経箱を、杜園が木彫で模写した物が、東京国立博物館に蔵されていて、借り出しに行った際、当然木彫だから木工室に伺った。しかし該当品が無く、もしやの思いで金工室を問うたところ、誰も箱から出したことが無かったらしく、関係者立ち会いのもと、該当品を見たところ、誰が見ても金属製品であった。それを取り出した際、その軽さに一同感嘆の声をあげた、という話を聞き及んでいる。故に三業はおろか四業とせねばならぬのである。

加えてもう一点。杜園は歌人である。幕末歌壇、柿園派の雄である伴林光平の歌塾・神風館で学んだ人である。光平が天忠組に走って後は、奈良押上町の醸造家・藤枝善四郎に指導を受けたという。歌人杜園の存在も見逃してはならないと思う。

もし叶っていたならば、杜園研究にとって一大福音をもたらしていたに違いない。図録は閉会前一日に完売してしまったという。

日本人形玩具学会の知友・林直輝氏が「現在の一刀彫(と称するもの)には、その名声を汚すような論外のものも多いのですが、この展覧会を「ご覧になれば、本来の奈良の一刀彫がいかに優れた芸術であるか、ご理解いただけるはずです」といみじくもSNSで評された如く、これだけの名工の作を通常目にする機会も無く、当然造る人も買う人も、「眼が落ちてる」のは当然の理であって、名人上手の作品は、常に展覧して眼や技を養っていかねばならない。

三十年前の展覧に存在した品々が消え去り行方不明となる一方、人々の努力で奈良に戻って来た物も

あり、戻って来つつも出陳を辞された作品もあって、悲喜交々に打ち過ぎたが、今回の展覧会の大看板に「これが奈良一刀彫です」との文言が書かれていて、日頃の溜飲が下がる思いがしたのは事実である。

杜園が作品の範とした松寿の作、杜園の後を追いかけた数多の奈良人形師の工夫や錬磨も忘れてはならないと思う。

奈良に於いて、杜園は神格化に近い扱いをされた人で、杜園の使い残した絵具を買い取った人。杜園の作りかけの品を有した家。杜園の看板を火鉢にして誇る人がいる。それ程杜園という人は、奈良の誇りとされてきた存在なのである。それが故に贗作も多く、かつては杜園の二セ物を専門に造る人が居て、良心のある人だったのか、見る人が見ると必ずこれがトエンの贗物である事が判るように工夫を施して



神品と称えられた、杜園作「玄武」  
撮影：岡下浩二